第78回大会Proceedings

The 78th General Meeting of The English Literary Society of Japan

20-21 May 2006

(付 ELSJ Newsletter No. 107)

日本英文学会

新シリーズ　**アジアを旅したヴィクトリア朝時代の女性たち**
Victorian Lady Travellers in Asia

第１回配本　マリアンヌ・ノース自伝　全３巻

Recollections & Further Recolletions of a Happy Life:
being the Autobiography of Marianne North

● 2005年10月刊行　●本体セット価¥48,000-（税込¥50,400-）
● ISBN 4-86166-026-2

イザベラ・バードとならぶヴィクトリア朝時代の女性旅行家マリアンヌ・ノース（1830-1890）自身が残した膨大な旅の記録。ノースの死後、妹が全3巻にまとめたものの復刻です。彼女自身の旅行での体験や他の女性旅行家の逸話などが挿入されており、ヴィクトリア朝女性旅行家の同時代の記録として代表的な文献です。

第２回配本
ヴィクトリア朝女性たちのアジア旅行記
《復刻集成》　第１期　全５巻＋別冊日本語解説

Victorian Lady Travellers in Asia: Collection of Travel Writings, Pt. 1

解説■志渡岡理恵（聖マリアンナ医科大学研究員）
● 2006年9月刊行予定　●本体セット¥98,000-（税込¥102,900-）●ISBN 4-

◆日本を含むアジアを広く旅した４人のヴィクトリア朝時代の女性の旅行記を復刻集成
◆多数の図版、地図なども含め初版を完全復刻

【収録文献明細】

VOL. 1
A Voyage in the "Sunbeam" : Our Home on the Ocean for Eleven Months
by Mrs. Brassey (Brassey, Annie Allnutt), 1878, xv, 504 p., 14 plates

VOL. 2-3
Wanderings in China, 2 vols. by C.F. Gordon Cumming (Gordon Cumming, Constance Frederica), 1886
Vol.1: vi, 382p., 4 plates / Vol.2: vi, 370p., 5 plates

VOL. 4
Newfoundland to Cochin China by the Golden Wave, New Nippon, and the Forbidden City
by Mrs. Howard Vincent (Vincent, Ethel Gwendoline), with Reports on British Trade and Interests in Canada, Japan, and China, by Col. Howard Vincent, 1892, xii, 404p., 13 plates

VOL. 5
When We Were Strolling Players in the East by Louise Jordan Miln, 2nd ed., 1895, xii, 354 p., 25 plates

「…こうした旅行記こそ、その図版ともども、当時の東洋への関心やジャポニスムの生み出したもうひとつの産物であると同時に、女性の眼にうつった事実を通してそれらを増幅し、かつその修正を迫ったものでもあるだろう。」　ー富山太佳夫「推薦文」より

発行元：Edition Synapse　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-5　【カタログ呈】
Tel: 03(5296)9186　Fax: 03(3252)1822　http: //www.aplink.co.jp/synapse

目　次

研究発表　page

ルネッサンスからバロックへ　山口志のぶ　11
ヘンリー・ジェイムズ後期三部作の創作順をめぐる謎を解く

小説という学校　杉本裕代　14
スーザン・ウォーナー『広い、広い世界』と American Lyceum 運動

ジャック・ロンドンにおける「体験」の位相　高村峰生　17

二つの海戦と「決闘美」　柳沢秀郎　20
Men at War の"Tsushima"と *The Old Man and the Sea*

20世紀のアーキテクチュア　岡本太助　23
Tours of the Black Clock のメタフィクション性と時空間の表象

文学と言語学の接点　安原和也　26
English Conundrums の意味構築を中心に

3語複合語のリズムと修飾部という概念　中澤和夫　29

アイルランド英語の形態・統語法的諸特徴　嶋田珠巳　32
John B. Keane (1928-2002)の言語をもとに

Troilus and Cressida における知覚理論　松岡浩史　35
価値の創造と「狂気の偶像崇拝」

『トロイラスとクレシダ』の終幕の不安　若狭智子　38
甲冑とヘクターの死

"Rome itself hath tried":　酒井もえ　41
Marston の Antonio 二部作における「新しいローマ」としてのヴェネツィア表象

'Beware of being misled by his *Paradise Lost*'　佐藤　光　44
Blake, *Europe*, and 'On the Morning of Christ's Nativity'

情念の耐えられない重さ　石塚久郎　47
情念の生理学からブレイクの「毒の木」を読む

Anna Barbauld's 'To a Little Invisible Being...'　Tristanne Connolly　50
Maternity in Poetry and Medicine

Donne から G. Herbert へ　村田俊一　53
T. S. Eliot の via media の視点から

神話的空間からウェールズ共同体へ　仲渡一美　56
Dylan Thomas, *Portrait of the Artist as a Young Dog* をめぐって

コケットリーと女子教育　藤澤陽子　59
18 世紀後半、英国における「改心するヒロイン」再考

テスのセクシュアリティ再考　鈴木　淳　62
テスの悲劇説明における語り手の動機との関連で

誠実な建築と不誠実な顔　福原俊平　65
A Laodicean 論

観察される心理と身体　関　良子　68
「グィネヴィアの弁明」における dramatic monologue の変奏

ホモソーシャルな男たちと穢された女　宮地信弘　71
『ドラキュラ』における Mina Harker

The Longest Journey と *Maurice* における「自然」　石井義秀　74

Fashion/Modernism　Kunio Shin　77
Virginia Woolf and the Question of the Literary Marketplace in *Orlando*

『波』におけるスーザン再考　横山勇子　80
自然、母性、共同体

パジェント表象の系譜　吉野亜矢子　83
キラークーチからバイヤットまで

「太平洋横断英米文学」の視座をさぐる　成田興史　86
若き日の T. S. エリオットを軸に

戦争加担者から平和主義者へ　上田敦子　89
Vera Brittain の *The Dark Tide* (1923) を読む

カリブの魔女と娘たち　岩瀬由佳　92
逸脱者から救済者への表象変遷をたどって

ポストモダン時代のエンディング考　沢田知香子　95
Muriel Spark の *The Finishing School*

記憶の手触りを再現する　三村尚央　98
Kazuo Ishiguro の作品における記憶表象の変遷

On the Nature of Focus Feature Organization　Koji Hoshi　101
Toward a Unified Account of the Additive *Mo* 'Also'

On the Category and Interpretation of Partial Control Infinitives　吉本圭佑　104

A Syntactic Analysis of Clause-Initial Adjuncts　Shin-ichi Tanigawa　107

A Construction Grammar Approach to *have* NP V-*ing*　Hideaki Gen'ey　110

Symposia

第一部門「英文学と＜文明化＞の変遷」
帝国の〈内部〉と〈外部〉をつなぐネイボッブ　末廣　幹　113

ならず者たちの礼儀　小西章典　116
初期近代イギリス演劇と〈文明化〉の裏側

ロンドンのステージ・アイリッシュマンと＜標準英語＞教育　岩田美喜　119

感受性と文明の境　久野陽一　122

第二部門「詩人の詩人論」
Milton の Jonson 像　山田由美子　125
快楽と徳の和解

「引喩」の政治性　大石和欣　128
ロマン主義時代の女性詩人による詩人論

"Egotistical Vocative"　笠原順路　131
あるいは、呼び出されたロマン主義的理想の自画像

第三部門「19 世紀イギリス小説に潜む＜食＞の諸相」
19 世紀摂酒／節酒と *Scenes of Clerical Life*　岩田託子　134

危険な食事　大久保譲　137

第四部門「「大戦間」の文化研究のために　共同体、ファシズム、精神分析」
大戦間の「文化研究」と自由主義イングランドの奇怪な死　河野真太郎　140

第五部門「中世ロマンス　文学的研究と語学的研究の壁を越えて」
文学ジャンルと言語　原野　昇　143

ロマンス・写本・scribal editing　田尻雅士　146
MS Ashmole 61 の場合

中世ロマンスと身体の形象化　山口惠里子　149
分断・エクスタシー・復活

第七部門「アメリカ文化・国家と恐怖　テロはどこにあるのか？」
Catastrophilia　Takayuki Tatsumi　152

The Future of a Delusion
How to Get Out of the Shadow of Terror?　Satoshi Ukai　154

アメリカ映画と黙示録の想像力　スーザン・J・ネイピア　156

応答　新田啓子　159

第十部門「中世文献の電子ファイル化とその利用」
The *Cely Letters* における各書き手の書記素分析
The National Archives のデジタル画像を利用して　小原　平　161

Textual Relationships and Author Differentiation　Karina van Dalen-Oskam　164

Julian of Norwich の Short Text
二つの校訂版の比較　吉川史子　167

第十一部門「形式と意味の接点」
場所句倒置構文の適格性条件　高見健一　170

結束関係と統語現象(概要)　岡田禎之　173

『大会Proceedings』に掲載される論文は、大会発表の長めの要約という性格のものですので、それに大幅に加筆して、別稿として『英文学研究』に投稿したり、新人賞に応募することは認められております。

日本英文学会第78回大会プログラム

時: 2006年5月20日(土)・21日(日)
所: 中京大学名古屋キャンパス
(名古屋市昭和区八事本町101-2)

第一日　5月20日(土)　(会費納入受付は正午より。0号館地階エントランスホール)

開会式　午後1時より(4号館3階431教室)　司会　中京大学教授　細川　眞
□開会の辞　会長代行　加藤光也
□挨拶　中京大学学長　小川英次
□第28回新人賞選考結果報告

研究発表　第1発表 13:45-14:25　第2発表 14:30-15:10
第3発表 15:20-16:00　第4発表 16:05-16:45

第一室(0号館7階701教室)　司会　京都大学教授　丹羽隆昭
1. ルネッサンスからバロックへ　ヘンリー・ジェイムズ後期三部作の創作順をめぐる謎を解く
流通経済大学非常勤講師　山口志のぶ
司会　お茶の水女子大学教授　竹村和子
2. *A Wonder Book* と神話愛好時代
京都大学助教授　水野眞理
司会　東京学芸大学助教授　若林麻希子
3. 小説という学校　スーザン・ウォーナー『広い、広い世界』と American Lyceum
筑波大学大学院　杉本裕代
司会　相愛大学教授　山下　昇
4. 『八月の光』　リーナ・グローヴを巡るフォークナーの人種意識
京都大学大学院　山内　玲

第二室(0号館7階702教室)　司会　青山学院大学教授　折島正司
1. ジャック・ロンドンにおける「体験」の位相
東京大学大学院　高村峰生
司会　国士舘大学教授　松本　昇
2. Negotiating Black Identity in Ralph Ellison's *Invisible Man* and Percival Everett's *Erasure*
慶應義塾大学他非常勤講師　Raphaël Lambert
司会　学習院大学教授　上岡伸雄
3. 二つの海戦と「決闘美」　*Men at War* の"Tsushima"と *The Old Man and the Sea*
中京大学非常勤講師　柳沢秀郎
4. 20世紀のアーキテクチュア　*Tours of the Black Clock* のメタフィクション性と時空間の表象
大阪外国語大学大学院　岡本太助

第三室(0号館8階805教室)　司会　茨城大学助教授　岡崎正男
1. 文学と言語学の接点　English Conundrums の意味構築を中心に
京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員　安原和也

さらにそれが女性の政治的抑圧とも絡んでいるのである。Elizabeth Bentley は、奴隷貿易廃止をフランス革命のような自由を保障する政治革命のごとくとらえ、イギリスの"patriots of Liberty"が"vile Oppression's hand"から"helpless suff'rers trembling at his nod"を救うべきだと唱える。[18] Mary Birkett もまた、貿易・通商が富を社会にもたらすと同時に奢侈による人倫の腐敗ももたらすという二面性があることを指摘し、奴隷の自由と権利は"the rights of Men"として訴える。[19] いずれの詩も、奴隷の苦悩は女性の苦悩と同時に抑圧されている全ての人々のものと重ねあわされて、自己利益のみを図る抑圧的権威への非難となっている。

詩人が他者の言葉を借りて自己を語る修辞としての引喩は、単に直線的かつ一方的な修辞にとどまらず、同時代において双方向的かつ重層的な呼応関係を持った特殊な形式の「詩人による詩人論」として機能しうる。文学的伝統の欠如した女性詩においては単なる引用や言及でしかない場合も多い。だが、その影には女性詩人の「自我」(ego) の叫びが潜伏し、ジェンダーや宗教性に関わるイデオロギーがその周りで渦を巻いているのである。文学的遺産が欠如しているなかで、女性詩人は男性的文藝共和国に参与するために「感受性」という武器を使いながら、広い意味での引喩を用いて男性的世界から批判的距離をとり詩人論を展開したと言えよう。暗闇の中に錯綜する多層的な女性詩人の「こだま」(echo) の繊細な響きに私たちはそっと耳を傾けなくてはならないのだ。

---

1 Christopher Ricks, *Allusions to the Poets* (Oxford: Oxford University Press, 2002) 33.
2 Ricks 23.
3 フェミニスト的な観点からこの時代の女性の財産の歴史的状況を考察したものとして Susan Staves, *Married Women's Separate Property in England, 1660-1833* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990).
4 *Quarterly Review* 7 (1812) 309; *Universal Magazine* 17 (1812) 217; *Eclectic Review* 8 (1812) 475.
5 Paul M. Zall はこの対峙をコールリッジ側から個人的レベルで考察する。"The Cool World of Samuel Taylor Coleridge: Mrs Barbauld and the Building of a Mass Reading Audience," *Wordsworth Circle* 2 (1971) 74-79.
6 S. T. Coleridge, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs, 6 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1956) 1: 578.
7 バーボールドの詩はすべて Anna Letitia Barbauld, *The Poems of Anna Letitia Barbauld*, eds. William McCarthy and Elizabeth Kraft (Athens: University of Georgia Press, 1994)から引用する。
8 S. T. Coleridge, *Lectures 1808-1819: On Literature*, ed. R. A. Foakes, 2 vols. (Princeton: Princeton University Press, 1987) 1: 407; Henry Crabb Robinson, *Henry Crabb Robinson on Books and Their Writers*, ed. Edith J. Morley, 3 vols. (1938; New York: AMS Press, 1967) 1: 62.
9 Henry Crabb Robinson, "Reminiscences" 1: 389 [MS DWL], as quoted in Barbauld, *Poems* 264.
10 W. J. Bate, *The Burden of the Past and the English Poets* (Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1970); Harold Bloom, *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry* (New York: Oxford University Press, 1973).
11 Andrew Ashfield (ed.), *Romantic Women Poets 1770-1838: Volume 1* (Manchester: Manchester University Press, 1995) 227.
12 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて変化していく読者層と文藝共和国の性質については、Jon P. Klancher, *The Making of the English Reading Audiences, 1790-1832* (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1987); Paul Magnuson, *Reading Public Romanticism* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1998); Paul Keen, *The Crisis of Literature in the 1790s: Print Culture and the Public Sphere* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999). もともとワーズワースとコールリッジ、あるいはロマン派におけるミルトン受容など引喩の問題に関心を抱いていた Lucy Newlyn であるが、*Reading, Writing, and Romanticism: The Anxiety of Reception* (Oxford: Oxford University Press, 2000)の第 4 章、6 章ではジェンダーや歴史状況を考慮しながら解釈学や間テクスト性の観点から女性詩を解釈している。
13 Charlotte Smith, *The Poems of Charlotte Smith*, ed. Stuart Curran (New York: Oxford University Press, 1993) 96-97.
14 William Wordsworth, *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*, eds. James Butler and Karen Green (Ithaca: Cornell University Press, 1992) 234.
15 Thomas Clarkson を中心に *The Society for Effecting the Abolition of the Slave Trade* が結成された 1787 年頃から、バーボールドやモアを含めた女性たちは、"Am I not a Man & a Brother?"と奴隷が訴える姿を刻んだ Wedgwood 製のブローチを襟元につけて奴隷貿易廃止のキャンペーンを積極的に推進した。William Roberts, *Memoirs of the Life and Correspondence of Mrs. Hannah More*, 2 vols. (London: Seeley, 1834) 2: 71.
16 Helen Maria Williams, *A Poem on the Bill Lately Passed for Regulating the Slave Trade* (London: T. Cadell, 1788) 21.
17 *Monthly Review* 80 (1789) 237.
18 Elizabeth Bentley, *Genuine Poetical Compositions, on Various Subjects* (Norwich: Crouse and Stevenson, 1791) 22.
19 Mary Birkett, *A Poem on the African Slave Trade* (Dublin, 1792) 12.

"Egotistical Vocative"

あるいは、呼び出されたロマン主義的理想の自画像

笠 原 順 路

[I] 序

詩においては通例、呼びかけの語 (vocative phrases) は、呼びかける対象物を出現させる。ところが、ロマン派を代表する幾編かの詩には、呼びかけの語によって対象物が現れると同時に、そこに呼びかける主体も立ち現われ、その二者が重ね合わさる、または融合することがしばしばある。その場合、呼びかける主体とは、詩人の自画像、しかも詩人が詩論や作品の他の箇所で描写している広義の理想とする詩人像であることがよくある。

念のため語句の意味から確認しておこう。本稿表題にいう "egotistical" とは、「利己的な」という義の "egoistical" ではない。もとの名詞 "egotism" の定義で言うなら「自分の事を言い過ぎること」(『新英和第辞典』第 5 版(研究社))、*OED* に拠れば "the practice of talking about oneself or one's doings" という意味である。*OED* の egotist の初出が、Addison が *Spectator* 紙、第 562 号において、*Les Essais* の著者 Montaigne を評したときに用いた例であるのは、己を語るという行為が西欧近代人の自我意識と密接に結びついている何よりの証左である。"Egotistical Vocative" とは「己を語る呼びかけの語」の意味である。

[II] P. B. Shelley, "Ode to the West Wind"

(要旨) ロマン派の詩のなかで恐らく最も呼びかけの語が高い頻度で用いられているのは、Shelley, "Ode to the West Wind"であろう。1〜3 節の冒頭の 13 行半は全て「西風」への呼びかけ、および同格の名詞句になっていて、主文は、1〜3 節いずれも最終行後半の hear という命令文のみである。第 1 節は、秋の西風によって吹き散らされる地上の枯葉を描写しながら西風に呼びかけ、第 2 節は、空の雲を描写しながら西風に呼びかけ、第 3 節では海を描写しながら西風に呼びかけ、それら対象物を呼び出し、描写している。第 4 節では、まずおびただしい数の一人称代名詞に注意したい。ここでは 1〜3 節までで呼び出された西風に対して、詩人の自我意識が刺激され、西風と詩人との落差、つまり二人称と一人称の落差が意識される。第 5 節は、風と自我の融合を求める風への呼びかけとなる。風そのものには遠く及ばないとしても、風をうけて音をならす Aeolian harp や森の木々のようになり、私の思いを世に広め、新たな誕生を刺激したい、という願望である。Be thou me.というのは、一人称と二人称の融合願望を最も直截に表わした言葉といえる。ちょうどまだ消えていない炉から灰や火の粉を散らすように、自分の言葉を人類の間に広めて、予言の喇叭とせよ、という願望表明は、Shelley が *A Defence of Poetry* の第 39 段落において述べた、創造する精神の比喩に酷似している。ここでは、創造する精神が、一陣の風がふいて一瞬光を放つ消えかかった石炭に喩えられている。また、予言の喇叭を吹き鳴らす己の姿は、同じく *A Defence of Poetry* 第 4 段落に定義されている詩人像 (legislator or prophet) と同じものと考えてよい。西風に対してさまざまな呼びかけを試みながら、最終的には、理想とする自画像を描きつつ、一人称と二人称の合一、つまり自我と自然との合一を求める。これが、Shelley, "Ode to the West Wind"である。

[III] William Wordsworth, "There was a boy", MS JJ.

テクストは次を参照——William Wordsworth, *The Prelude or Growth of a Poet's Mind*, ed. E. de Selincourt, rev. Helen Darbishire (Oxford: At the Clarendon Pr., 1959) 639-40.

この断片は、まず vocative の二重構造になっている点に注意したい。語りの外枠として、語り手が rocks / And islands of Winander & ye green / Peninsulas of Esthwaite に呼びかけ、ある少年のことを覚えているかと訊ねるという構造があり、その内部にその少年が鳥たちに語りかけるという構造がはめ込まれている。

まず外枠。最初、少年は外界と分離している (would he stand alone)。そして内枠でその少年が自然に働きかける、つまり鳥の声をまねる。すると鳥から応答があり、この時点で三人称代名詞が一人称にすりかわる。鳥の声が、語り手を呼び出したのだ。前置詞 with の目的語がいつまでたっても終わらないのは、周囲にこだました鳥の声が長く尾を引いているからだろう。"a wild scene / Of mirth and jocund din" とは、鳥の喜びでもあり、少年の喜びでもあり、詩人の喜びでもある。ここで、少年と、彼が呼びかけた自然と、それによって呼び出された語り手が一つになる。但し、ここでの自然とは鳥だけである。

静寂。そして静寂のなかでの hung listening。これは呼び掛けの内枠内部で達成された自然との融合が、聞き耳をたてるという行為により、呼び掛けの外枠、つまり鳥以外の自然、に拡大してゆくプロセスだ。と、谷川の音が語り手の (耳ではなく) 心に聞こえて来る。散文として見れば不可解な文法構造である。谷川の音が聞こえ

てきて、心のなかで驚きを感じているはずなのに、shock が主語の位置にある。もしかすると the voice of mountain torrents の方が would carry の主語なのかもしれない。いずれにしてもこの語順では、まず最初に a sudden shock of mild surprize が語り手によって知覚され、その元を糾せば、谷川の声が心の奥深く（far）へと運ばれていたからだ、という意味になろう。これは、心の内部で感ずるはずのものが心の外側に位置している、あるいは知覚の順序が逆になっている、そういう構文なのだ。

"or the visible scene" 以下、視覚によって知覚される自然の光景が、知らないうちに詩人の心に入り込む。その後の with 以下はまたしても文法構造が判然としない。一応、可能性が高そうな2通りの読みを示しておこう。(1) ampersand で切れるとすると、received 以下が限定的に that uncertain heaven を後置修飾し、that uncertain heaven 以下が一まとまりになっていると解すると、湖面には heaven だけが映っていることになる。この場合、空と湖面（＝湖の胸）が合せ鏡を形成するというイメジャリが濃厚になると言えるだろう。(2) with を付帯状況の with ととると、[A] would enter into [B] with [A] received into [B'] という構文になる。その場合、湖面には空だけではなく its solemn imagery すなわち its rocks; its woods; that uncertain heaven が映っている、という解釈になる。この構文における B（＝「私」の心）は、B'（＝空を映し出す湖面）と等価なはずである。つまり、湖は詩人の心が外在化したものなのだ。湖面を bosom と呼んでいるのが何よりの証拠である。

まとめよう。語り手が ye rocks and islands...と自然に呼びかける行為により、また、少年が鳥の声を真似て、鳥たちに呼びかける行為により、詩人の自我が立ち現われる。a sudden shock of mild surprize と the voice of mountain torrents のどちらが would carry の主語でどちらが目的語か判然としないところの syntax は、心が外在化した状態と、自然が内在化した状態が同時に存在していることを構文上みごとに表わしている。空と、湖の「胸」とが合せ鏡をつくるというイメジャリは、自然と心が向き合った時に作り出される無限大の奥行きを構文上表わしているということができる。 far という語はそうした心の奥行きの深さを表わして余りある。

William Wordsworth, "There was a boy", MS JJ. においては、 Wordsworth 流の呼びかける行為が、Wordsworth 流の自画像（＝自然と融合した人間精神）を出現せしめている。このように、Wordsworth の自然描写というのは、自然だけを讃美しているのではなく、それに比例して詩人の自我意識も描き出し、自然と自我の両者が sublime になる、つまり崇高さを獲得すると同時に理想化され純化される。Keats が Wordsworth を egotistical sublime と呼んだ所以もここにあると解釈したい。

[IV] Lord Byron, *Childe Harold's Pilgrimage*, Canto IV, Sts. 128-45 ("The Coliseum episode")

Arches on arches...と、荘重な文体の叙景で始まり、月光に照らされたコロセウムを描写し(128 連)、コロセウムを廃墟ならしめた《時》を讃美し(129 連)、130 連で感情が高まり、嘆呼的に《時》に呼びかける。呼びかけているうちに《時》が《復讐の女神》として認識されてきて、同時に自我意識が刺激される。vocative により egotism が刺激されるのが、まさにここである。131 連では、コロセウムに立つ自分を描写するのに、《時》を祀る神殿の捧げ物のなかに、語り手が自分の身（ruins of years 年月を経た廃残の身）を捧げる、と述べる。

以下、137 連までは、肥大化した自我意識、Byron 流の egotism が、作者 Byron の私事、しかも別れた妻 Annabella Milbanke やその一族とおぼしき者への怨み辛みをぶちまけさせる。最新の Byron 詩集の校訂者 J. J. McGann は、この脱線部分（130-38 連）を評し「この巻における最も赤裸々な自伝的詩行」と述べている。

しかし、138 連でのべているように、自我を肥大化させ私事をぶちまけてしまうと、次には自我が縮小を始め、自分がコロセウムに同化して、他からは見られずして、そこで起こった全てを見る(we become a part of what has been, / And grow unto the spot, all-seeing but unseen.) ことになる。作品中、最も感動的ともいえる剣闘士の最期の場面(139-41 連)は、こうして、自我を滅却した語り手があたかもその土地の霊（genius）となって、闘技場で繰り広げられた過去の出来事を回想したものなのだ。が、不思議なことに、最期を迎えるこの剣闘士は、離婚した妻の実家から攻め立てられ、そのうえ社交界から追われ傷ついた Byron 自身の姿と重なってくる。無論、139-41 連に、Byron の私事を示唆する表現はない。だが、そこを読む一体誰が、130-38 連の修辞的残像を消し去ることができようか。妻子から引き離され、異郷の地で息絶えてゆく剣闘士は、いくら自己を空しくしようとしても、自分の姿が見えてくる詩人 Byron の自画像なのだ。

では、このなかの一体何が Byron にとっての理想の自画像なのか。Byron の場合、特定の詩論を展開しているわけではないが、結論をさきに一言で言えば、「廃墟に立つ己の姿」というのを、理想の自画像と考えたい。Byron はこれまで *CHP* においては、ギリシア Sounion 岬（II, sts. 85-86)、ライン河岸の古城（III, sts. 46-47)、ヴェネチア（IV, st. 25)などで感懐を吐露するにあたり、廃墟に立つ自分の姿を自画像のようにして描いてきた。とりわけヴェネチアでの a ruin amidst ruins という発言は、*CHP* のそして Byron の基本的な廃墟感といっても過言ではない。ここ Coliseum episode でも、廃墟に宿る《時》に対して己の身を献ずることにより、廃墟のなかの

廃残の身（a ruin amidst ruins)という理想の自画像が出来上がる。さらに地霊（genius loci）のようになった語り手が見た過去の剣闘士が、作者 Byron と同じ運命を背負っているのも、もう一つの a ruin amidst ruins の図である。

ケース・スタディとして第 132 連を見てみよう。この連は基本的に《時》への呼びかけである。thou は 130 連以来《時》なのだが、130 連の avenger をうけて、thou=Nemesis の図式が成り立つ。以後、次の 133 連まで、二人称代名詞が 8 回使用されるが、Time という呼びかけは皆無であるので、どちらかというと Nemesis として thou が意識されていると言った方がいいだろう。最初の 2 行は、thou who と始まり great Nemesis と終わっており、vocative case。次の 3 行目から主節が始まるかと期待して読むと、Here, where...と場所を表わす副詞句となり、4 行目で再度 Thou who...と vocative case となり、いつまでたっても主節が登場しないことから苛立ちが増す。にも拘わらず who の節は 3 行にもわたって続き、6 行目の dash の後いよいよ主節かと思いきや、主節とは無関係な Sir Ralph Noel らの仕打ちを思わせることに関する作者の感想（just...near）が入り込み、さらにその上 3 行目の Here と同格とおぼしき場所を表わす副詞句 in this thy former realm が来て、やっとのことで I call thee from the dust と弱々しい文体ながら一応主節になる。が、次の最終行前半部では、Dost thou not hear my heart?とまたしても作者 Byron が顔を出し、その Byron を押さえ込むようにして最終行後半部で、文体も elevated style になり、本来の主節になる、が、それもわずか半行で終わってしまう。語り手の《時》への呼びかけが、己を語りたいという作者 Byron の自我と、文体上、そして文法構造上、激しく拮抗している連である。ここでの Time=Nemesis への呼び掛けが、以後、語り手を呼び出すことになる。因みに次の 133～137 連までの 45 行で用いられる一人称代名詞は 33 個ある。

[V] John Keats, "Ode on a Grecian Urn"

（要旨）これは、想像上の urn への執拗な呼びかけ（＝問いかけ）を特徴とする作品である。Thou still unravish'd bride of quietness という descriptive vocative から始まり、質問が矢継ぎ早になされる（What leaf-fring'd legend...; What men or gods...; What maidens...; What...; What...; What...; What...?)。ちょうど、精神的な追求は、追及する者の熱意によって実体 reality を獲得する（Keats' Letter to Benjamin Bailey, 13 March 1818）という Keats の詩論のように、次から次へとなされる質問によって、徐々に対象物の形が明らかになってきて（urn の周囲の文様の描写が 2～3 連と続き)、urn の文様があまりに reality を得たので、第 4 連ではその文様の物語の前後までも想像して質問する（Who are these...; What little town...)。最終第 5 連では urn が言葉を話す（＝未来の人間に教訓を語る(say'st)）に至っている。（もっとも Beauty is truth...というフレーズが motto のようにして壺の表面に浮かんでくると、とれなくもないのだが、say という語を用いている点が重要である。）

この作品においては、urn だけが呼び出されて、呼びかける主体としての詩人の自我は現われてこない。呼びかける詩人の自我を極力抑えた形になっている。しかしこれとても「詩人には個性体がない」という Keats の詩論（Keats' Letter to Richard Woodhouse, 27 Oct. 1818）を表わしたもので、理想の自画像（＝無としての自我）と呼び得るものであろう。

[VI] 結語

これらの作品を総括すれば、Shelley の場合、呼びかけによって立ち現われた詩人の自我が、外界の自然と融合こそしてはいないが、融合にむけての激しいエネルギーがあった。Wordsworth の場合は、少年＝詩人の精神は、韻文のみに可能な文法構造も手伝って、周囲の自然と融合を果たしていた。では Coliseum episode における Byron はどうか。一方において、Byron 個人の自我が拡大し私事をぶちまける、その一方で、語り手の自我は滅却・縮小し、genius loci のようになって周囲からは見られずに、その場で過去に繰り広げられた剣闘士最期の場面を見る。Keats の場合、壺への呼びかけは、「無」としての理想の自我を呼び出した。

嘗て Keats は Wordsworth のことを egotistical sublime と評し、理想の詩人たる者、それとは反対に個性を有していてはならない、と述べたことがある。（Cf. Keats' Letter to Woodhouse, 27 Oct. 1818: Poetical character as opposed to Wordsworthian or egotistical sublime....）その場合、egotistical sublime を、「己のことばかりを語る尊大な者」という第一義に加えて、sublimated egotism「純化した、理想化した、自我意識の表明」の意にも解釈すれば、本発表で見てきたとおり、Wordsworth のみならず、Shelley, Byron にもそして、当の Keats 自身にも egotistical sublime が当てはまる。その重要な契機となるのが、呼びかける行為 vocative なのである。ロマン派における呼びかける行為（＝一人称から二人称への働きかけ）は、自我（＝一人称）が理想化・崇高化(=sublimate)し、対象（＝二人称）との融合を図り、そこに理想化された自画像を表わすのである。

第78回大会Proceedings

平成18年9月10日　発行

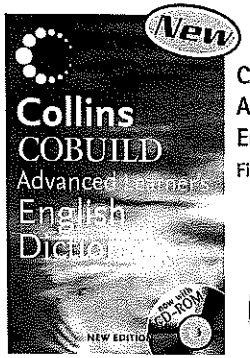
編集・発行　日本英文学会
代　表　者　高　橋　和　久
印　刷　所　株式会社　大　鷹
発　行　所　財団法人　日本英文学会
東京都千代田区神田駿河台 2-9
研究社ビル501　(〒101-0062)
電話 (03)3293-7528　FAX (03)3293-7539
振替 00130-8-49760

©財団法人　日本英文学会　2006

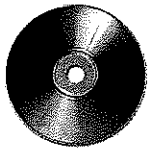
THOMSON

トムソンELTが

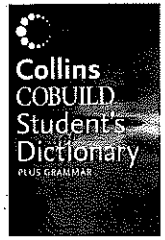
コリンズコウビルド英英辞典を発売することになりました！



Collins COBUILD
Advanced Learner's
English Dictionary
Fifth Edition

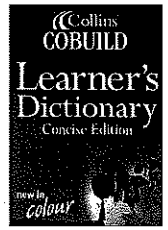


Paperback (1776 pp.) with CD-ROM	0-00-721012-4
Hardcover (1768 pp.) with CD-ROM	0-00-721013-2



Collins COBUILD
Student's Dictionary,
Plus Grammar Third Edition

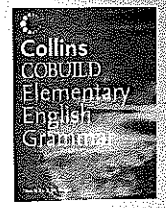
Paperback (1088 pp.) with CD-ROM	0-00-718386-0
Paperback (1088 pp.)	0-00-720203-2



Collins COBUILD
Learner's Dictionary,
Concise Edition Second Edition

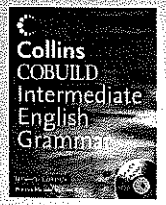
Paperback (1344 pp.) with CD-ROM	0-00-712640-9

. . . plus a wide choice of grammar references.



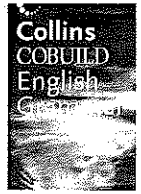
Collins COBUILD
Elementary English
Grammar Second Edition

Paperback 0-00-714309-5



Collins COBUILD
Intermediate English
Grammar Second Edition

Paperback 0-00-716347-9



Collins COBUILD
English Grammar

Paperback 0-00-718387-9

Collins COBUILD
Active English
Grammar

Paperback 0-00-715802-5

こちらの商品に関するご質問は、下記連絡先までお気軽にお問い合わせくださいませ。

elt.thomson.com　Tel: 03 (3511) 4392　Fax: 03 (3511) 4391　E-mail: elt@tji.co.jp